戦の合意を目指しているが、双方の主張の間には依然溝があり、予断を許さない状況が続いている。

イスラエルは7月8日、ガザからの攻撃阻止を目的に空爆を中心とした軍事作戦を開始、その後、地上作

検問所に到着

ウクライナ

【モスクワ共同】ロシアがウクライナ東部ルガンスクの住民に向けて送った人道支援物資を載せた200

求めている。

ウクライナ側の支援物資の配給は既に始まっており、ICRCは16～17日に野菜や果物などの食料100トンを東部ルガンスク州の10都市の住民に配ったと発表した。

慰安婦だった韓国人女性

人全員の手を握り、うち1人の話に耳を傾けた。元慰安婦を支援するバッジが手渡され、教会関係者が法王の胸元に着けた。

世界的に影響力を持つ法王が元慰安婦の女性らに共

国の朴槿恵大統領もミサに出席した。元慰安婦と同席することで、慰安婦問題の解決を国際世論に強く訴える狙いがあるとみられる。

パチカンの報道官は、今回の元慰安婦との接触など

私のなかの歴史

ヒグマ研究45年 ①

北海道の宝物 共存するための手だてを

動物学者

門崎（かどさき） 允昭（まさあき）さん

みなさん、今年4月、檜山管内せたな町で山菜採りの女性がクマに襲われ、けがをした事件を覚えていますか。

同行の男性がナタで追い払ったのですが、ナタに付着した血液のDNAからほぼ1年前に同町で女性を襲って死亡させたのと同じクマだと分かりました。

「人を恐れない危険なクマだ」と、大勢のハンターと道の防災ヘリコプターとで異例の大捜索を展開しましたが、発見できませんでしたね。

同じヒグマが連続して、あるいは間を置いて人を襲った事例は、1970年以降の北海道で今回を含めて5例。過去の4例の概要は次の通りです。

70年7月、日高山脈を縦走中の福岡大学ワンダーフォーゲル部員5人がカムイエクウチカウシ山で3日間にわたって襲われ、3人が亡くなりました。

76年6月、千歳市の風不死岳で6日間に森林作業、山菜採りの5人が襲われ、2人が死亡、3人がけがをしました。

翌77年、大成町（現せたな町）で5月に山菜採りの人、9月に釣りの人が襲われ死亡しました。

99年5月、渡島管内木古内町で川釣りに行った1人が死亡、山菜採りの2人がけがをしました。

こんな話をすれば、「クマはやはり恐ろしい」と不安をあおるかもしれませんね。しかし、決してそうではありません。70年から45年間で、ヒグマによる人身事故（ハンターを除く）は年平均1件程度。大まかに言うと、北海道に約2千頭のヒグマがいるので、1年間に人を襲うヒグマの存在率は2千分の1、となります。

この率をさらに下げることが可能です。被害を予防する手だてを実行すれば、人間とヒグマとの共存ができるんです。

ヒントは、今回のせたなの事例にあります。男性がナタで反撃して痛い目に遭わせたことです。クマは、人間の怖さを学びました。そして、人目を避け、奥山に身を潜めてしまいました。

ですから私は、あのクマは「もう決して人を襲わない」と断言できます。今なお人を恐れないというなら、いくらでも目撃されたり被害が出ていますよね。

過去の4例でも、最初の被害者がナタなどで反撃していたら、自身がけがをしたり命を落とすことはなかった。2度目、3度目の被害が起きることもなかった。私はそう考えています。

過去4例の加害クマはいずれも駆除されました。今回のクマもとことん追い詰めて駆除すべきでしょうか？　もう人に襲を及ぼすことはないから追い詰めないでほしい。そう願っています。

ヒグマは見る者に、畏敬の念を覚えさせる生き物です。野生のオーラというか、威厳を感じている。母グマの愛情に満ちた子育てにも心を打たれます。アイヌ民族は、ヒグマをカムイ（神様）と呼びました。私も、北海道の宝だと思います。

70年にヒグマ研究を始めて45年、ヒグマとの共存は可能だと学びました。どうしたら共存できるか、ぜひ知っていただきたいのです。

（聞き手・中塚直樹）

38年（昭和13年）、帯広市生まれ。帯畜大大学院で獣医学修士、北大で農学博士取得。専門は、陸生脊椎動物の生態と形態。70年から99年まで北海道開拓記念館研究員、学芸員。99年から北海道野生動物研究所・北海道熊研究所長。著書に「ヒグマ」（共著）「野生動物調査痕跡学図鑑」「アイヌの矢毒　トリカブト」など。札幌市厚別区在住。

登山者との遭遇を避け、雪渓に身を潜め様子をうかがう若いクマ

マーケット

機ドディスプレーの開発会社をソニー、パナソニックとともに設立するジャパンディスプレイの大塚周一社長(62)は「技術的なハードルは高いが、開発できれば大きな可能性が

有機ＥＬ開発

大きな可能性

て軽い次世代型ディスプレーとして期待されているが、品質の安定や採算性が課題だ。

「長年各社が開発してきた成果を持ち寄れば、実を結ぶかもしれない」と量産の事業化に意欲を示した。

私のなかの歴史

ヒグマ研究45年 ②

父と登山　ナタ携える「礼儀」を学ぶ

動物学者
門崎（かどさき）　允昭（まさあき）さん

帯広生まれで6人きょうだいの三男です。1952年、中学2年生の時、父と兄2人、姉と私の5人で登山をしました。日高山脈北部の剣山（1205㍍）です。

午後10時すぎ、帯広発の鈍行列車に乗り、御影駅（十勝管内清水町）で下車。山麓まで約10㌔の真っ暗な夜道を歩きました。

懐中電灯もない時代です。途中の旭山集落の電柱に裸電球が一つだけともっていて、その下で休息した記憶があります。

私（左から2人目）が4歳の時の両親、きょうだい6人の家族写真

「ここから奥地はクマが時々出るから、父さんより先を歩いてはだめだ」。父はそう私たちに言い渡しました。

父は腰にナタを携えています。「クマが襲ってきたときの武器になるし木を切ったり、ササやぶを切り開いて進むことができる。山では必需品だ」と効用を話してくれました。

父は十勝支庁（現・総合振興局）拓殖課に勤務していました。山奥の開拓予定地を調査する仕事です。クマを見る機会は多く、知識も豊富で、仕事では必ずナタを携えていました。

「クマが出る」と聞いた時は恐ろしかったけれど、父と一緒なので、安心できました。

剣山は霊山、信仰の山です。山道に石地蔵が並び、信者が休む小屋がありました。小屋の裏の沢で、水筒代わりの四合瓶に水を詰めました。それから険しい道を4㌔歩いて頂上に着きました。

千㍍付近で見事な雲海が広がり、頂上では透き通る青空に金色の太陽がまぶしく輝いていた。初めて見る別世界。いまでも、あの光景は目に浮かぶ。人生初めての登山でした。

高校、大学、大学院と山岳部で活動しました。山行で、ナタを忘れたことはありません。

クマに刃物で反撃して事なきを得たというケースをお話ししましょう。

70年7月、士別市で75歳の農家の男性が山林の下草刈りをしていてクマに襲われ、とっさに、手持ちの草刈りガマをたたきつけ追い払いました。後に駆除されたクマの頭骨にカマの先端の鉄片が刺さっていましたね。被害者にお話をうかがい、その草刈りガマも頂き、資料として保管しています。

77年3月末、三笠市で山林作業の方がクマにかみつかれ、同僚から投げ渡された手斧（ておの）で追い払いました。いずれも、刃物による反撃がなければ、生命にかかわった可能性があります。

70年以降、クマによる人身事故は87件。逃げる際に転んでけがした、といった5件を除くと実質的には82件。ハンター33件（死亡10件）、一般の人49件（同20件）。一般人で刃物で反撃したケースが少ないのが残念です。

私は、クマのすむ場所に分け入るときに、ナタを持つことが「礼儀」だと考えています。自分の命を守り、結果的にクマの命、すみかをも守ることになる。

女性だってナタを持ってください。アイヌ民族の女性は、たとえ隣家に行くにもマキリ（小刀）を手にしていましたよ。アイヌ民族のクマとのつきあい方に学ぶことはたくさんあります。

私のなかの歴史

ヒグマ研究45年 ③

犬飼先生 師弟の交わり 20年以上

初めてヒグマを見たのは1955年、高校2年生の初夏です。山岳部の友人と2人で1週間かけて羊蹄山、ニセコ方面など道内の5山をめぐる登山旅行の最初、芦別岳での出来事でした。

開削されたばかりの新道ルートを登りました。ほかに登山者はいませんでしたね。途中の半面山を過ぎた熊ノ沼という水たまりの付近。30メートル向こうに何かいる！　クマでした。体長1・3メートルそこらだったと思います。

動物学者
門崎（かどさき）　允昭（まさあき）さん

どうしたらいいか分からないけれど、「もし向かってきたら、腰のナタで立ち向かうぞ」―そう自分に言い聞かせているうちに、クマは姿を消しました。

友人と2人、しばらく立ちすくんでいました。「どうする？」「せっかく来たんだから行こうや」。そんな会話をして、気を取り直し頂上に向かいました。

クマを本当に意識するようになったのはその後です。

大学山岳部では、日高山脈の稜線（りょうせん）や沢をほぼ踏破しました。氷河期の名残でカール（圏谷）と呼ばれる地形があります。氷河に浸食された、浅いおわん状のくぼみです。日高山脈には22、23カ所あるとされ、すべてたどりました。

クマがハクサンボウフウなどの根を掘った跡を観察する私

日高の登山では、沢を詰めてカールを目指すのが、一番楽なルートということが多い。カールには夏場も雪が残っていて、流れ出る水が得られ、宿営に適した平たん地もあります。お花畑が広がり、ほっと安らげる別天地です。

そこは、ヒグマの天地でもあります。カールの残雪の上に、足跡やふん、近くの草むらにはハクサンボウフウ、チシマニンジンなどの根を掘り返して食べた跡があります。

身震いするような緊張感とともに、すごい獣が北海道にいるんだ、という感動を覚えました。

帯畜大大学院に進み、登山を続けながら家畜生理学を専攻し、鳥類の呼吸器を研究しました。教授は東大獣医学科出の淵名重海先生で、山岳部の顧問でした。鳥類は、気嚢（きのう）という効率的で独特な呼吸器を持っています。だから潜水したり、高空を飛翔（ひしょう）してヒマラヤ越えなどできるのですね。

私は、死んだ72種の鳥類を解剖し形態や、七面鳥を卵からふ化させて呼吸器の発生過程、さらに機能も研究しました。淵名先生は、この分野の大御所でしたが、71年に亡くなりました。

動物学者、犬飼哲夫先生（北大名誉教授）との出会いは、先生が畜大に集中講義に来られた時でした。「毛皮（もうひ）動物学」という講義で、休憩時にお茶をお出しし、山の話もするといったご縁からです。

犬飼先生はヒグマも研究されていました。研究分野は被害、および民族学的な見地からでした。

先生はヒグマに関する論文を17編執筆していますが、そのうち共著が10編。そのうち8編が私との共著です。87年には、北海道新聞社から「北海道の自然　ヒグマ」を共著で刊行しました。

犬飼先生との師弟の交わりは89年、91歳で亡くなるまで20年以上に及びました。先生には多くの教え子がいますが、ヒグマに関しては私が一番弟子。そう思っています。

（聞き手・中尾吉晴）

私のなかの歴史

ヒグマ研究45年 ④

開拓記念館

生態調査に明け暮れる

動物学者
門崎（かどさき）　允昭（まさあき）さん

1970年、私は開館1年前の北海道開拓記念館（札幌）の研究員になりました。初代館長は恩師、犬飼哲夫先生です。

最初に取り組んだテーマは「北海道の自然と開拓の関係」。明治期からの開拓が、自然に与えた影響、それによって人と野生動物にどんなことが生じたか調査・研究し、公表するのです。

開拓使の事業報告などの公文書や古い新聞に目を通し、人的、経済的な被害をリストアップすることから始まりました。

開拓とは、言い換えると、クマの生息地を取り上げることです。

母の元を離れた1歳5カ月の若グマ。子が1頭だと早く自立する

クマの反撃ともいえる事故も多発しました。例えば1878年（明治11年）1月、札幌で猟師に追われたヒグマが反撃、さらに丘珠地区の開拓農家に侵入。3人が死亡、2人が重傷を負っています。

開拓使は、入植者に銃を持たせるべきだった。銃が無理なら、やりを支給してほしかった。アイヌ民族はオプクワという1・8㍍ほどのやりを所持していました。

粗末な開拓小屋の窓から侵入して人を襲ったケースは多い。板に五寸くぎを打ち、裏返して軒下に置くだけで防げたでしょう。

ヒグマのことを何も知らない人々を呼び寄せ、開拓に従事せしめた。今もそうですが、行政はクマ対策に無知です。

1967年まで農地・放牧場の造成が続き、家畜の被害も74年まで多発しました。クマの生息地を農牧地にした場合、そこを利用していた個体から子、孫の3世代にわたって、その場所に出没するということが分かっています。

一方、人の生活圏で最後の人身事故は64年、日高管内平取町で小学生の女の子が市街地から3㌔離れた地点で襲われ亡くなりました。これ以降の事故はクマの生息地、出没地で起きています。ですから、人の対応次第で事故を減らすことは可能なのです。

私の業務はもう一つ、ヒグマの生態を調べることでした。胆振管内厚真町奥地の道有林が、札幌に近い割に多くのクマが生息し、冬ごもりの穴もあって絶好の観察地でした。

クマが好んで通る沢沿いを一人でたどり、周囲360度を見回して足跡やふん、木に登った跡、アリを食べるために地面を掘り返した跡などを観察します。

当時、全道的にシカが少なかった。草むらに幅30㌢くらいの動物が歩いた気配があれば、それはヒグマが通った道。クモの巣が張ってあるかどうかで、いつごろ通ったかも分かります。

7月、木の上の山ブドウは熟していないのに、クマのふんに山ブドウの種と皮がいっぱい入っていました。「どこかに熟した実があるのか？」と不思議でした。

ササ原を歩いていて、山ブドウのつるに足を取られ、答えが分かりました。木がないササ原で地べたをはう山ブドウの実は、木の上より気温が高いせいか熟していました。ヒグマは、こうした場所の山ブドウを食べていたのです。

71年から11年間、毎年50日以上、現地に足を運びました。ここで、ヒグマの生態について多くを学ぶことができました。

（聞き手・中尾吉清）

私のなかの歴史

襲われたら「死んだふり」より応戦を

動物学者
門崎（かどさき） 允昭（まさあき）さん

私は生態調査の結果から、人に対するヒグマの行動を、次の9種類に分類しています。

①人と遭遇しないよう、注意しながら行動する

②人が来たら、身を潜めるか移動する

③人と遭遇したら、すぐに身を翻し離れていく

④その場でしばらく人の様子をうかがう。立ち上がることもある

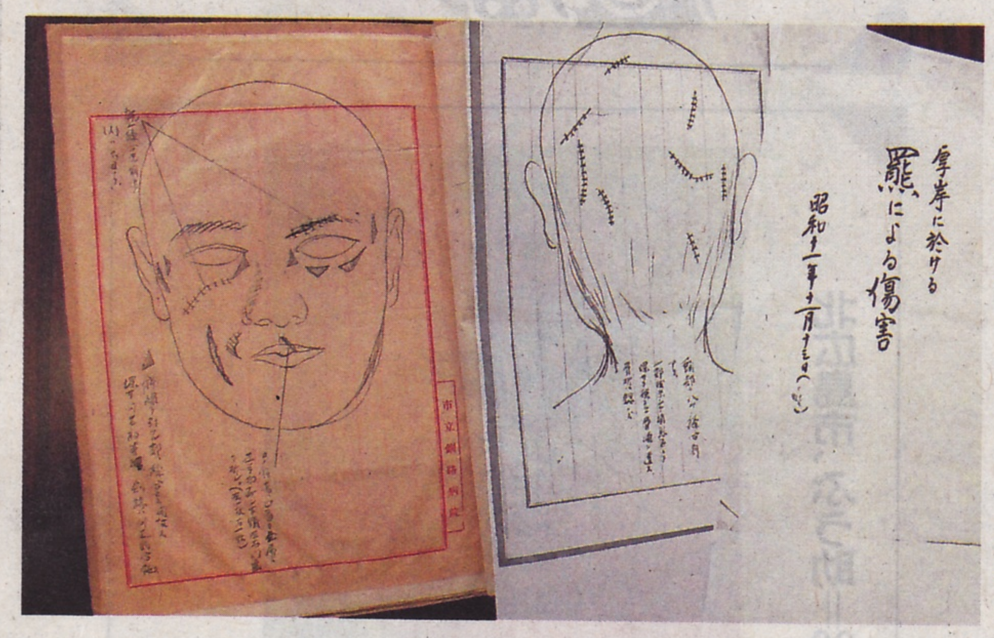
⑤少し近づいて来ることもある。人の様子をうかがい、なかなか離れていかないこともある

⑥前記⑤で、その後、瞬時に身を翻し去る場合と、ゆっくり離れていく場合がある

⑦脅しに、瞬時に人に突進して人の数メートル前で止まり、一瞬ほえるなどする。また、瞬時に後退し、やおら歩いて去ることがある

⑧クマの以前からの生活地で、今も周囲に草木があり、しかも人が危害を加えないと分かれば、平気でその場にいて離れようとしないことがある

⑨まれに人を襲う。瞬時に襲いかかるのと、にじり寄る場合とがある



1936年の事故で、医師が図解した負傷部位の一部

人間はどう対応すべきでしょう。距離が30メートルあれば、まずは安心です。不意の出合いを避けるため早く人がいることに気付いてもらうのが肝心。ササやぶ、見通しの悪い道では笛を吹いたり「ホッ、ホッ」と声を上げます。

母グマがわざわざ幼い子グマを連れて人や車に近づいて来ることがあります。⑤のパターンに該当します。この行動を、私は子グマに人間のことを教えている、と思うのです。母子の間に割って入るのは危険です。母子はその後、⑥の行動に移ります。

④⑤⑧の行動が「人を恐れない新世代グマ」などとマスコミで表現されますが、見当外れも甚だしい。昔からの、クマのごく普通の行動です。登山道などでは穏やかに声をかけ、30メートルの距離を保って回り道すれば問題は起きません。

⑦の行動に対して、走って逃げるなどの大きな動作は禁物。気を強く持ち、ナタを構え、戦う覚悟を決めてください。ゆっくり後ずさりするのはいいです。

さて⑨の場合、「死んだふり」はどうでしょう。私が生還した方に聞き取りした結果、これで助かったという方はゼロでした。戦うしかありません。

過去の文献にある「死んだふり」例を参考にしましょう。江戸時代末期の1864年、オホーツク管内斜里町でアイヌ民族の青年が至近距離で出合い、死んだふり。額から頭にかけて2、3回ガリガリかまれ左耳がもぎ取られた。

1925年（大正14年）、釧路管内厚岸町で男性が2度かまれ、もう駄目だと判断して起き直り、ナタをクマの顔面にたたきつけるとクマは逃げた。

36年（昭和11年）11月、同じく厚岸町で、被害者は47歳の男性。医師が、負傷部位の図解を残しています。頭部、顔面、両腕、胸、背中、腰など、傷は58カ所にもなりました。

死んだふりをしても、このような攻撃を受けるのです。あなたは黙って耐え抜くことができますか。ほかの人にも勧めますか。

（聞き手・中尾吉清）

私のなかの歴史

積極的共存 ナタと笛手に自然楽しむ

動物学者
門崎（かどさき） 允昭（まさあき）さん

最後に皆さんに質問です。山菜採り、あるいは登山で山に行ったら、林道に「クマ出没」の看板。日付は最近です。あなたは、どちらの答えを選びますか。

①楽しみにしていたが、やはり引き返す②笛も持ってきたし、ナタもある。行ってみよう

もう一つ質問です。登山道の近くにクマがいて草をむしゃむしゃ食べ、人を気にするふうもない。回り道はなく、登山者が停滞している。

①引き返す以外にない②頂上に行きたいし、皆でクマに「ホイ、ホイ」と声をかけながらゆっくり前進して登山を続ける

答えは、引き返すのも、そのまま進むのも、それぞれ正解。皆さんの自己責任で自然を楽しめばいいのです。ただし2問目のケースでは、その場所を餌場として利用しているクマの普通の行動で、「人を恐れない新世代グマ」「危険なクマ」などではありません。

道のホームページでは「出没情報のある地域や、出没を知らせる看板がある場所を避けましょう」と勧めています。檜山管内せたな町は「山や畑でヒグマのふんや足跡を見つけたら、すぐに引き返しましょう」と呼びかけています。

クマ同士のあいさつ。写真上の左が若グマ、右が大人のクマ。2頭が一瞬、鼻先を付ける（写真下）

要するに、クマは危険で恐ろしいものという前提の事なかれ主義。実に消極的な姿勢で、これではクマと人間が本当に共存していくことにはならない。

私は1991年、サハリンで1カ月、93年にカムチャツカ半島クリル湖畔で10日間、ヒグマの調査をしました。クリル湖畔では96年、写真家の星野道夫さんがヒグマに襲われ亡くなっています。

アラスカ、カナダ、北米でもホッキョクグマ、アメリカヒグマ、クロクマを調査しました。

カナダ、米国の人々は釣り、キャンプ、トレッキング、カヌーなど野外の趣味を楽しんでいます。ふんや足跡を見たから引き返す、などという人はいませんね。

ただし彼らはおおむね銃やピストルを持ち、「クマが寄ってきて万が一の場合は撃つ」。これでは、私たちの参考にはなりません。

私はクマとの「積極的共存」を唱えています。北海道は古くからクマがすんでいて、クマのいる自然が本来の姿なのです。それを前提に、クマについて理解を深め、自己責任の下、積極的に自然の恵みをクマと分かち合ってゆこう、という考え方です。

アイヌ民族はそうしてきました。現代でも、クマがいる地域の住民は、クマがいて当たり前、という意識で日々の暮らしを営んでいます。

昨年7月、研究者仲間らと共に、道庁を訪れクマに関して道民に啓発すべきこと、積極的な共存の実現を申し入れました。今後も、私は発言を続けていきたいと考えています。

北海道の自然は豊かで、魅力的です。山菜採り、登山、キャンプ…積極的に利用しましょう。そのためには、繰り返しますが、ナタと笛を必ず携行してください。

（聞き手・中尾吉清）

＝おわり＝

次回は柔道家、佐藤宣践（のぶゆき）さんです。

私のなかの歴史

箱わな駆除

無用な捕殺招く恐れも

動物学者
門崎（かどさき）　允昭（まさあき）さん

ヒグマの狩猟ができるのは10月1日から翌年の1月末まで。それ以外の期間は「有害獣」として駆除されます。狩猟された数と駆除された数の合計が捕獲数。2013年度のヒグマの捕獲数は567頭（未確定値）。狩猟が32頭に対して、駆除は535頭と圧倒的に多い。

人身事故で一般人の場合は、クマは襲いやすい部位をかむ、ひっかく。ナタなどで反撃するとクマは引き下がるものです。

母グマと5カ月齢の子グマたち。子グマは2月1日を誕生日とする

ハンターに対してクマは、血を流しながらも徹底的に反撃します。ハンターはほぼ100％顔面をたたかれ、重傷あるいは生命に関わることがある。

私は156人のハンターにクマの頭骨の提供を受けたり、冬ごもりの穴に案内してもらうなどお世話になりました。その一人、根室管内羅臼町の高嶋喜作さんから1980年10月、「クマにやられた。現場を案内するから来ないか」と電話をもらいました。

最初は、母子連れと分からず子グマを射殺。母グマが子グマに駆け寄った。高嶋さんは息子さんと、母グマも射止めようとササやぶに分け入った。すると、紛らわしい足跡をわざと残す「止め足」を使って近くに潜んでいた母グマが高嶋さんに猛然と襲いかかった。

先を歩いていた息子さんはやり過ごしている。息子さんが母グマを射殺し、高嶋さんは腕をかまれただけで済んだ。

自分の子を撃ったり自分に傷を負わせたハンターを選んで襲う。ハンターの顔をしっかり見て覚えている。クマの視力、知力を物語る行動だと思います。闇夜でサケを捕まえ、クマ牧場で投げられたビスケットを上手にキャッチする。視力の良い動物ですよ。

高嶋さんは5年後、再び狩猟中にクマの反撃に遭って亡くなった。狩猟が好き、山を歩くことが好きな方だった。

私は、人類の長い営みである狩猟は否定しません。銃を手にクマに立ち向かうのは、生業としても趣味としても結構だと思います。

しかし、箱わなによる駆除はいかがなものか。クマが脱出しようと身体を傷つけたり、長く放置され飢餓状態の末に射殺される。倫理的問題はありませんか。

「養蜂の被害に遭った」と、仕掛けたとします。おびき寄せる餌は蜂蜜だけでなく、リンゴ、干し魚、家畜の飼料なども入れる。これでは巣箱を荒らした個体とは別のクマまで入ってしまう。

人家の近くに出没する、といっても仕掛けるのは少し奥地です。無関係のクマまで捕まえ、射殺することになってしまいます。

どうしようもない悪いクマは駆除するしかない？　私はこれまで多数のクマを見てきました。気高く、堂々としている。母グマの子育ては愛情に満ちていて、心が打たれます。出合った若いクマがカチカチと歯がみして向かって来ることがあります。「驚かしてごめんな」と声をかけると、穏やかな目になって去っていきます。

「駆除するしかない悪いクマ」を私は見たことがありません。電気柵、有刺鉄線を張るといった被害防止策が先ではないでしょうか。

（聞き手・中尾吉清）

私のなかの歴史

札幌で大騒動 若い個体が探索しただけ

動物学者
門崎（かどさき） 允昭（まさあき）さん

札幌市内で2011年から住宅、市街地でクマの出没が相次ぎ、マスコミで大騒動になりました。理由と対策を2回に分けて考えてみましょう。

札幌の円山、藻岩山などの西側は100～1500メートル弱の山が連なる幅36～40キロの樹林帯です。1970年代末まで、銭函川上流域―手稲山―砥石山―島松山を結んだ線の西側がクマの生息地でした。

私は64年以降、半世紀間のこれから生息地におけるクマの捕殺に関するデータを持っています。72年から39年間は、捕獲された現場に赴くなど生息環境を自ら調査しました。他の期間は、札幌市の資料を入手しています。

この生息地で4、5月に穴ごもりのクマの猟が行われていました。高価だった熊の胆（い）（胆嚢（たんのう））が目当て。子グマは生かして連れ帰りました。85年にこの猟が行われなくなってから、徐々に東側に行動圏が広がってきたのです。

94年に里山、公園などで時々、出没が確認され99、00年の2年間はともに5件出没。01年以降は10件を超えるようになりました。いきなり増えたのではなく、徐々にです。

どんなクマが、なんのために出没しているのか。野生動物の行動には理由・目的があります。それを正確に把握することが人的、経済的な被害を防ぐ第一歩です。

多いのは親離れしたばかりの若グマ。子グマが1頭だけの場合は1歳で、2頭以上の場合は2歳で親離れします。その時期は5～8月で、「子グマ」から「若グマ」と呼ばれるようになります。

若グマは、自分の生活圏を確立するため森林を探索、徘徊（はいかい）します。林の端に人家があったら…母グマといる時は、近づくことは禁じられた行為でした。独り立ちした今、そこがどういう場所か好奇心を起こし、近寄って自分のすみかに利用できるか確認します。

このように若グマが自分の生活圏を探すのは野生のおきて、体験しなければならない行動です。

これに対して「道に迷った」とか「人を恐れない新世代グマ」などという論評がありますが、見当外れだと思います。

若くても野生動物が道に迷うことなどあり得ません。突然、通り道に巨大な構造物を造られた、などの場合は別ですが。

若グマたちは日没から夜間、朝方にかけて本能的に人を避けるように行動しています。昔からの普通のクマの、当たり前の行動です。これのどこが「人を恐れぬ新世代」なのでしょう？

本当に人を恐れないなら、昼日中でも姿を見せるし、同じ個体が毎月、毎年ずっと繰り返して人前に現れるはずですね。しかしながら、これまで一番長く市街地に滞在した個体でも数日間です。

あの若グマは納得いくまで探索して、「ここは自分がすむ場所ではない」と悟り、立ち去ったのです。あのクマが再び市街地に戻って来ることはないでしょう。

私の45年間の調査では、2歳未満（体長1・3メートル以下、足幅13センチ以下）の若グマが人を襲った例は一度もありません。

（聞き手・中尾吉清）

7カ月齢の子グマ。5カ月齢に比べ手脚が長くなり大人びてくる

私のなかの歴史

出没の対策 いて当然の場所」啓発を

動物学者
門崎（かどさき） 允昭（まさあき）さん

札幌の市街地へのクマ出没対策として2012年9月、南区川沿地区の北の沢川沿い約300㍍の河畔林が伐採されました。

13年9月、南区真駒内柏丘で若い雄が駆除されたケースでは、このクマは豊平川の河畔林を伝って市街地に迷い込んだ、などというコメントも新聞に紹介されていました。しかし、河畔林伐採は、クマ対策として有効なのか。私には疑問があります。

札幌で騒動になる以前の03年11月、苫小牧市の市街地、港周辺などにクマが出没。依頼を受け、移動経路を調査しました。港周辺には河畔林などの樹木はない。水路を伝っていた、と推測しました。

立ち上がると2㍍になるクマだって四足歩行の時の目線の高さは1・2㍍くらい。高い木がなくても水路、堤防の内側なら、人目を意識せず歩けます。ですから河畔林の伐採は無意味。木を無意味に切り倒すのはよくありません。

札幌では、このような出没は今後も毎年起こるでしょう。しかし、それは、従来の「すみ分け」が崩れたことを意味しません。

数日間滞在しても、やがて自分が本当に生きていける場所を求めて去っていきます。これら若グマは人を襲うことはありません。

若グマ以外の出没もあります。農作物、果樹を食べることが目的だったり、樹林地から樹林地へと移る際に道路を横断して目撃された、というケースもあります。これらは年齢に関係ない出没です。

人家の近く、公園などで出没を防ぎたいのなら、有刺鉄線を目幅15㌢、高さ1・5㍍ほどに張るといい。

南区白川などの果樹地帯では収穫期に一時、電気柵を張り巡らすといいでしょう。

たまたま山の道路を横断したのを目撃した程度なら対策は必要ないし、新聞・テレビのニュースにする意味もないですね。

藻岩山などの遊歩道を通行止めにする、など行政の対応は事なかれ主義だと思います。安易に閉鎖すべきじゃない。クマがいて当然な場所だから、出合うかもしれない。それに対して笛、ナタなど相応の準備をして、自己責任で自然を楽しめばいいのです。

観念的にクマの存在を許せない、恐ろしいという人がいます、そういう人に言いたいのです。実際に自然の中でふんや足跡を見たら、さらに恐怖がこみ上げるかもしれない。

しかし、同時に「すごいな！」って、感動が湧いてくるはずですよ。クマは、そうした人に感動を覚えさせずにおかないオーラを発散させている生き物です。

アフリカのライオンがすんでいる場所よりも、札幌の方が自然が豊かでは。そう思います。

札幌圏でヒグマによる人身事故は01年5月、定山渓で山菜採りの男性が襲われ亡くなった事件以降、一件もありません。クマの生息地と人の生活圏は画然と区別されているのです。

札幌の市民は、この大都市にクマも一緒にすめる自然を誇っていいのではありませんか。行政は、そう啓発するのが一番大切なクマ対策だと私は考えています。

（聞き手・中尾吉清）

母の方を振り返りながら去ってゆく、自立の時を迎えた若グマ

私のなかの歴史

アイヌ民族　共存する英知　信仰の中に

動物学者
門崎（かどさき）　允昭（まさあき）さん

アイヌ民族は「イヨマンテ」という、クマ送りの儀礼を営んできました。彼らの豊かな精神世界・宇宙観を物語り、クマと共存する英知が込められています。

世界には南米のメガネグマを含め7種類のクマがいますが、イヨマンテに類似のクマ信仰は北半球でのみ行われています。文献調査では65の民族で、対象のクマはほとんどがヒグマです。

一般的なクマ信仰は、狩猟した個体を悼んで鎮魂する儀礼。アイヌ民族のイヨマンテは「神を行かせる」といった意味で、送り儀礼であるという点が特徴です。

アイヌ民族は自然の物、人工物でも自然現象でも神の化身・所作の結果と考え、壊れた道具や狩りの獲物などをすべて神の元に返す送り儀礼を日常的に営んでいました。イヨマンテも、そうした送り儀礼の一環であった、と私は解釈しています。

いつごろ始まったのか不明ですが、江戸時代中期の1710年、幕府巡検使に加わっていた松宮観山が、蝦夷通詞（えぞつうじ）（アイヌ語通訳）から聞き取った「蝦夷談筆記（えぞだんひっき）」に詳細な式次第が記録されています。明治時代とほぼ同じ。ですから、18世紀初頭に儀礼として完成されていた、と考えられます。

冬ごもりの穴から連れ帰った子グマに女性が乳を与えるなどして育てる。11月から翌年1月に大勢を招いて、成長したクマを神の国に送り返す。丸太で絞め殺すのが、樺太も含めたアイヌ民族の特徴。宣教師でアイヌ文化研究者のジョン・バチェラーは「クマに悲惨な声（悲鳴）を上げさせないため」としています。同感ですね。

愛情を込めて育てたクマの死を嘆きながら、団子や酒などをたくさん供え神の国への土産にしてもらう。神の国に帰ったクマは人間の世界での歓待を報告するので、再び神の国からクマが土産を持ってやってくる、と考えるのです。

以上は「飼いグマ儀礼」ですが、狩猟先で、あるいは狩猟先から頭ど毛皮を持ち帰って営む送り儀礼もあります。

江戸幕府、明治政府は「残酷だ」などと禁止しました。クマを神として敬う人々に、その批判は的外れです。異文化を認めず、同化を迫る、間違った政策でした。

イヨマンテは可能な限り古式にのっとって定期的に催すべき文化だと考えます。アイヌ民族の人々だけでなく和人も見学したりテレビで放映できないでしょうか。

和人、アイヌ民族がそれぞれの文化を尊重して交流し共生する。あらゆる生命を大事にしよう、とイヨマンテを通じて学ぶことができると思うのです。

アイヌ民族は、クマを神様と考えながらも、出合わないよう気を付け、遭遇し襲われたときには戦うためのタシロ（山刀）を携行するなど北海道の大地でクマと生きる英知を持っていました。

これまでもアイヌ文化振興・研究推進機構の依頼でアイヌ民族とヒグマをテーマに講演してきましたが、本年度から3年間、同機構のアドバイザーを務めます。多くの皆さんに、北海道のヒグマ、アイヌ文化の素晴らしさを伝えたいと考えています。

（聞き手・中尾吉清）

大雪山系の登山道で、かゆいのか道標に背中をこすりつけるクマ

私のなかの歴史

子育て 追い払った先 見続けた母

母グマの子育てについてお話しします。北海道開拓記念館に勤め、胆振管内厚真町の道有林に通い始めた45年前から多くの母子を見てきました。ヒグマは1～3頭の子を産みます。3頭生まれるのは全体の1・7％とごくまれで、2頭が47％、1頭は51％です。

冬ごもりの穴で出産。穴を見ると、生まれた子のふん尿はありません。母グマがなめ取っているのですね。母グマのふんは穴の隅にあります。

動物学者
門崎（かどさき） 允昭（まさあき）さん

4月下旬から5月上旬に冬ごもり穴を出てくる。このころの子グマの体長は50センチくらい。6月に60センチくらいです。子グマはよろけながら必死に母の後をついて歩く。時々、母グマは子のそばに行って体をなめて元気づける。愛情に満ちた感動的な子育てです。

危険が迫って「来い」というときに、子グマが来ないとたたくこともありますよ。

雌雄とも冬ごもり穴を出たクマが真っ先に向かうのは湿地で、「ミズバショウを食べる」と言われますが、私が観察したところ、同じサトイモ科のザゼンソウを好むようです。特徴的な花序と仏炎苞（ぶつえんほう）は残し、茎葉と根を食べます。

ザゼンソウがある所はクマの着き場になる可能性があるとも言えます。標高が高いとザゼンソウがないので、ミズバショウを食べます。いずれも刺激物があり、人間が口にすると、口内が焼けただれるので注意してください。

大雪山系で、大雪山ヒグマ調査会代表の小田島護さんが1980年から観察していた有名な「ヒグマのK子」。私も、81年から91年まで度々8月か9月に高根ケ原東部の高原沼一帯で観察しました。K子は80年から12年間で4回出産し6頭の子を育てました。

1、3回目の出産は双子で2、4回目は1頭。子が1頭の場合、1歳で自立しました。栄養豊富なおっぱいを独占できて早く成長するからです。2頭の場合は2歳で親離れしました。

85年に生まれたのは四郎、五郎の兄弟です。2頭はいつもじゃれ合い、取っ組み合って遊んでいました。そんな時、K子は無関心で草を食べたりしています。

しかし、四郎は翌年8月、落石が当たって死んだ。五郎は臆病で、いつもK子に寄り添っていたので難を逃れました。K子は四郎の死骸を食べてしまいました。そうすることが愛情で、わが子の死を受け入れ、けりを付けているのでしょう。

四郎が死んでからK子は、頻繁に五郎の遊び相手をするようになりました。それも、大げさなアクションで。母グマは、子グマの成長に遊びがとても大事だと分かっているんですね。

母子の別れは春から初秋のころ。K子は五郎を2年5カ月育てて、87年7月に自立させた。K子は徐々に五郎と距離を置き、やがて威嚇して追い払いました。

五郎はそれでも母を忘れられず、時々、K子が見える場所に現れ、母を見つめ、寂しそうに何度も振り返りながら立ち去ります。K子も、五郎の行方を静かに見つめていました。見ていて、涙が出そうになる、別れのシーンでした。

（聞き手・中尾吉清）

母グマと、その胸元に寄り添う子グマ

私のなかの歴史

知床半島 観察適地 駆除より予防を

動物学者
門崎（かどさき） 允昭（まさあき）さん

2005年、知床は世界遺産に登録されました。「これで、知床ではクマやシカが殺されることはなくなる」。私はとても期待したものです。

その期待は裏切られました。今でも世界遺産地域も含め斜里（オホーツク管内）、羅臼（根室管内）でクマの駆除が続けられています。許されるのでしょうか。

知床半島では8～11月、河口に数時間いれば、母子や単独のクマが必ず現れてマスやサケを捕まえて食べる。幕末の探検家、松浦武四郎が道内各地で目撃したクマの生態が今も見られる所です。

母子グマは雄を恐れるものです

雄への母グマの対応。写真上は、雄（右端）に近づく母グマ。写真下では母グマは子グマの元に戻る

が、ある時、母グマが子を残して単独で3㍍まで雄に接近した。2頭は無言で見つめ合っていたが、やがて雄が目をそらした。すると母グマは子グマの所に戻り、草を食べ始め、雄はそれを離れて見ていました。

近づいて見つめ合うのが、クマの仁義というか礼儀で、雄が顔をそむけたのが了解、というOKサインなのでしょう。知床は、そんな生態を観察できる所です。

「興奮させるので、クマに合ったら大声を出してはいけない」などと言われますね。知床の19号番屋の大瀬初三郎社長は、日本で一番多くクマに遭遇している人です。彼は「コラッ」と大声でしかりつけて退散させています。

知床では魚道がなくサケ、マスが遡上（そじょう）できない砂防ダムがたくさんあります。撤去するか、V字の切り込みを入れるなど遡上できるよう改良してほしい。

知床で出没を繰り返すクマを箱わなで捕獲し、おりを棒でガンガンたたくなどしておびえさせた後に山に返す「学習放獣」が行われたが、そのクマは出没を繰り返し、ついに射殺された。

学習放獣は広島県で始まりました。箱わなにかかったツキノワグマにトウガラシ成分のスプレーを浴びせる。目や喉にひどい苦痛を味わっても、再び出てくることもある。その理由、目的を調べ解決策を探るのが大事で、「お仕置き」で済むのではありません。

生態調査としてクマ、シカの首に重たい発信器を装着させていますが、動物虐待です。その調査で何かが判明して、その成果を住民に還元できているでしょうか。

もちろん、何も対策をしなくていい、などとは考えていません。知床半島の斜里側はそうでもないですが、羅臼側には人家に山が迫りクマとの「すみ分け」があいまいな場所があります。

人里近くのクマによる人身事故は1964年、日高管内で起きて以降ゼロと言いました。しかし、羅臼側では、再びあり得ない、とは断言できない。「すみ分け」を確実にすることが必要です。

そうした場所では人家の山側に左右150㍍ずつ、計300㍍の有刺鉄線を張るのがいい。電気柵は草や枝が接触しただけで漏電し効果がなくなります。有刺鉄線の方が、効果は確実です。

子供の通学路は、安全のために山側にずっと有刺鉄線を延ばすべきでしょう。クマは川伝いに歩き、橋の下を通って海岸に出るので、クマの通行の支障にはなりません。

（聞き手・中尾吉清）

私のなかの歴史

人との共存 すみ分け 日常的には成立

動物学者
門崎（かどさき） 允昭（まさあき）さん

北海道にヒグマは何頭いるのか。有名な「ヒグマ3千頭説」があります。犬飼哲夫先生が昭和10年代に唱えた、当時の捕獲数、出没状況などから算出したものです。

犬飼先生は、前にもお話ししたように被害の見地からのヒグマ研究者。成果を市民に還元しなければなりません。求められる成果とは、被害を減らすこと。「有効な手段が確立できないなら、生息数を減らしてしまえ！」―そういう圧力にさらされる立場です。

私は、クマが捕獲された場所、性別、連れていた子グマの数、年齢などを調べ、それを基に道内のヒグマの生息地、生息個体群の詳細な実態が分かると考え、犬飼先生にお話ししました。

明治時代の初めからずっと雄雌、年齢などの制限がなく捕獲されてきたので、捕獲したクマの統計を取れば、その性比、年齢などは生きているクマにも当てはまるはずですね。

1977年、先生は私の考えに賛成して、その調査を行うよう道に申し入れたのですが、具体化しませんでした。そこで翌年から開拓記念館が独自に調査することになりました。犬飼先生が代表者となり、たくぎん総研の協力を得ました。

当時の全道212市町村にクマの捕獲場所、年月日、推定年齢、性別、農作物・家畜・養蜂の被害などをアンケートし集計。私が現地を調査しました。「トウモロコシ畑が荒らされた」と回答があっても、1㌶全滅なのか、一部なのかも調べました。それらによって、その場所をクマが長期にわたって利用しているのか、たまに来ただけなのか、なども分かります。

調査の結果、84年時点で生息数は子グマが生まれる前の段階で約1900頭、生まれた後は約2300頭と推定されました。性比はメス1頭に対してオス1・2頭、母が伴う子グマは平均1・52頭などということも分かりました。

ほかにも重要なことが分かりました。ヒグマの生息域に関することです。

ヒグマが春夏秋冬の1シーズン以上、あるいは越冬、あるいは年中過ごしている場所を「恒常的生息地」と定義しました。84年時点で、全道の面積の約50％であることが明らかになりました。

そこは山地・丘陵の森林、草原などに限られ、人とヒグマが接して暮らす混生地域はもはやなかった。これは、日常的には人とクマとの間で「すみ分け」が成立していることを意味します。

「これでクマとの共存も夢ではなくなったね」「こんな調査を僕はやりたかったんだよ」。犬飼先生はそう言って非常に喜ばれました。

それから先生と私はたびたびヒグマの保全策を話し合いました。北海道の森林面積の10％（全道の7％に相当）の56万㌶（大雪山系23万㌶、日高山地25万㌶、知床・阿寒山地8万㌶）を保存地区として残す、といった具体策です。

「1900～2300頭」は現在もしばしば引用されますが、あれから30年。今にも当てはまるのかは分かりません。増えている、ということはないと思いますが。

（聞き手・中尾吉清）

野外調査する犬飼哲夫先生。必ずナタを携帯していた
＝1975年、札幌・定山渓